# 【人物探訪】鈴木重胤

## 学問への姿勢

まだ「お国自慢」などをした経験はないだろうが、これから先、いずれ県外の多くの人と知り合いになり、あなたも兵庫県について語る年ごろになる。そんな時あなたは、どう兵庫県を語るだろうか。

県外の人に兵庫の印象を訪ねると「スポーツが盛ん」だと言う人が多い。中学校、高等学校とも各種目に強く、兵庫県出身の実力者が競技スポーツ各分野に多いと言う。確かに、それも言えるだろう。

さらに加えるとしたら、県人の先達に「学問好き」が多いことを誇りたい。もちろん各地にそれぞれ学問で名をはせた人はいるだろうが、そうだとしても、兵庫県の先達には、自慢できる人がたくさんいる。

この本で紹介されている下中弥三郎さんは百科事典の生みの親だ。柳田國男さんといえば日本の民俗学の開祖であり、和辻哲郎さんは我が国の倫理学の基礎を築いた。このほかにも、三島徳七さんは「ＭＫ鋼」という今も生活に役立っている磁石を発明している。幕末の先駆者川本幸民は西洋の化学を研究し、明治初期の日本の文明の発達をけん引した。

兵庫県が生んだこのような識者は挙げればきりがないが、ここで「学問好き」ということで紹介したい人物が、一人いる。

鈴木重胤。淡路島津名（現在の淡路市）の出身。幕末の国学者である。

＊

「国学」とは、日本の古典を研究し、仏教や儒教が渡来してくる以前の日本固有の精神を明らかにしようとする学問のことで、江戸時代の中期におこり、蘭学と並んで当時を代表する学問の一つだった。鈴木重胤はこの国学を研究した学者の一人で「日本書記伝」（未完）を著した。

日本は中国の影響を受け、古くから律令制度が国家体制の基本になってきた。律令とは法に基づく制度で、儒教の思想がその背景にあった。国学はその思想に対して、日本古来の精神的な良さを生かそうという考え方から生まれた。国学者に賀茂真淵という人がいるが、真淵は「万葉集」にこそ古い時代の日本人の精神が含まれていると考え、その研究に生涯をささげた。

＊

重胤は庄屋の息子である。当時、淡路の庄屋では国学が盛んで、島内の各村の歴史を調べて本に残すような者もいるほどだった。重胤の父も例外ではなく、古典の研究に時を忘れて打ち込むような人だったといわれる。息子の重胤はその影響を受け、幼いころから知らず知らず学問の道に入り込んでいった。

しかし、重胤が十四歳の時、父が亡くなってしまう。大黒柱を失った鈴木家は生活に苦しむようになり、家計を助けるために重胤は大坂（現在の大阪）の鴻池家に商業見習いとして奉公に出た。

＊

学問好きの重胤にとっては辛い決断だったが、むしろこのことが幸いした。もともと賢かった重胤は仕事をすぐ覚え、効率よく働いた。

当時鴻池といえば大商店で、国学、和歌、俳諧、茶の湯、生け花、囲碁に至るまであらゆる道の文化人が出入りしていた。重胤の向上心は、この人たちと接触することでますます高まった。

和歌に興味のある重胤が、ある時和歌の師匠が主人と話をするのを障子の陰で聞いていた。それを知った主人は感心し、重胤をその師匠に引き合わせたという。重胤は和歌の道で才能を発揮し、三十歳になるころには、師匠と呼ばれるほどに腕を磨いた。

＊

重胤の「国学」との出会いは、出雲の国学者岡部東平の書物を読んでからであった。彼は東平師に会って議論に臨んだが、そこでまったく歯が立たない己を知る。もっと広い分野を深く研究しなければならないと、研さんを積む日々を過ごした。そして再び東平師と議論に及んだ。しかし結果は無残なものだった。

落胆する彼に故郷淡路の母から

「一度で東平師に及んでいたら慢心していただろう。及ばぬことがよかったのだ。学問は一生かかっても十分になることはない」と便りがあった。ここで我に返った重胤は、が然勇気を出し学問に打ち込んだ。

一年が経ち、すでに出雲に戻っていた東平師を訪ね、重胤は三たび議論に及んだ。東平師は重胤の学問の成果に驚いたという。感服した東平師は、重胤に「自分の息子を学僕にしてほしい」と申し出たという。

これを契機に重胤はますます研究に打ち込み、後世に名を残す国学者としての道を歩んだ。

本資料の著作権は兵庫県教育委員会に帰属します。
本文のすべてまたは一部について無断で複写して使用することを禁止します。